

テスの転落

宮崎 孝 一

I

エンジェル・クレア (Angel Clare) にくり返し求婚を求め、ついに承諾したテス (Tess) が、自分がすでに処女ではないことを彼に告げるべきかどうかに迷い、手紙で母親に助言を求めたところ、母親は次のような返事をよこした。

... with respect to your question, Tess, I say between ourselves, quite private but very strong, that on no account do you say a word of your Bygone Trouble to him... Many a woman — some of the Highest in the Land — have had a Trouble in their time; and why should you Trumpet yours when others don't Trumpet theirs? No girl would be such a Fool, specially as it is so long ago, and not your fault at all. I shall answer the same if you ask me fifty times... (1)

(お尋ねの件については、内々の話ですが、どんなことがあっても、過ぎてしまったあやまちについては、相手の方に一言も言わぬよう、こっそり、だが、はっきりと申して置きます。... 若い頃に間違いを起こした女というものは、せうにいるのだし、この土地の大家の奥さんたちにしたって、やっぱりそうなのだから。そんな自分の間違いを吹聴する者などいないのに、どうしてお前だけが吹聴することがあるのですか。そんなばかなことをする女はいないし、ことに、せいふん前のことでもあり、まったくお前の落ち度ではないのだから、五十べん聞かれても、わたしの返事にはありません。...)

この母親の論法は、テスの過去の秘密を、世にある多くの同様の事件の中の一つと見、あり勝ちなことなのだから気にする必要はないということである。母親の手紙を読んだテスも一時はこの忠告に従おうとしながら、結局はエンジェルに打ち明けてしまうのだが、元来彼女には、自分以外にも同様の場合があるとうことに安心なり慰めなりを見出すことので

きなり気持ちがあつたのだ。これより先アレク・ダーバヴィル (Alec D'Urberville) に処女を奪われたテスが、着のみ着のまま家に戻つて来たとき、母親は、さうなつたからにはアレクにお嫁にもらつてもらうべきだと息券くが、テスは言う、"Perhaps any woman would except me."⁽²⁾ 「たぶん、あたし以外の女だったらみなさうするでしょうね」

また、トールボセーズ (Tolbothays) の酪農場で知り合つたエンジェルに、歴史の勉強を勧められたときも、彼女は言つてゐる、"... what's the use of learning that I am one of a long row only — finding out that there is set down in some old book somebody just like me, and to know that I shall only act her part; making me sad, that's all..."⁽³⁾ 「……自分が長い行列の中の一人にすぎないということを知つたところで——何かの古い本の中に、あたしとそつくりの人のことが書いてあるのを見て、あたしもその人と同じ役をするだけなんだと知つたところで、なんの役に立つんでしよう。ただ悲しくなるだけのことですわ」右の二つの例に見られるように、テスは、ほかの女性はともかく、自分はこうするのだという一徹なところがあり、また過去に同じような例があつたということも、彼女にとつては悲しみの種になりこそすれ、慰めにはならないのである。

一方テスの母親の生き方、考え方は、決して美しいとか、清純だとかいう名で呼べるものではないが、しかし、古くからのいなかの生活に根ざした、土俗的な知恵を備えており、

消極的ではあるが、それなりにあるまじりを持つている。テスもこの種の生き方に徹していたならば、あれほどの不幸に陥らないですんだかも知れない。ところがテスには、小学校を出ただけの彼女であつたが、自我の目ざめとも呼ぶべきものがあり、それが彼女を土俗的な身の処し方に安住させないのである。彼女はまず何よりも自分の心に対して忠実であらうとした。

しかもその一面、テスには母親の生き方に近い古風なところもある。彼女が古い伝説や迷信の支配を脱け切っていないことは、その土俗的一面の表われであらう。たとえば、エンジェルとの結婚が迫つたころ、彼から贈られた花嫁衣裳を着てみたときテスは、この衣裳の色が変わつて自分が処女でないことが露見したらどうしようとする。一度貞操を破つた女がそれを着るとわかつてしまうという魔法の着物についての中世の伝説を扱つた小唄を、彼女は思い出したからであつた。⁽⁴⁾ またテスとエンジェルが結婚のために農場を出発する前に鶏が昼鳴きしたときも、テスはそれを凶兆と感じておののく。⁽⁵⁾ テスがこのような迷信的なものの暗示を受けるのが、自分の過去を隠してエンジェルと結婚しようとしているときであるのは偶然ではあるまい。このとき彼女は、先に見た母親の忠告に従つた消極的な身の処し方をしてるのであつて、それだからこそこのような土俗的な信仰の支配下に入つてしまつたのであつた。

II

テスとエンジェルが結婚するために酪農場を去った直後、それまで彼らといっしょに働いていて、それぞれエンジェルを恋していた娘たちがめいめいに大變な反応を示す。すなわちレティ(Retty)は身投げをしようとし、マリアン(Marian)は酔いつぶれ、イズ(Izz)は部屋に閉じこもって悲しみに沈んでしまう。荷物を運んで来たジョンサン・ケイル(Jonathan Kail)からその話を聞いたとき、テスは即座に、自分の過去をエンジェルに告白しよう決心し、それを実行する。愚かではあつても純真な友だちの気持ちに打たれ、テスは自分も虚偽に基づいた結婚をすることは許されないと感じたのであつた。ここで彼女は、母親の忠告に従つていた生方を離れ、本来の自己に戻つたのだが、しかし、告白の結果エンジェルに与えたショックが余りに大きいのを見たとき、テスは又もや母親の思考に戻つて行く。彼女は言つてゐる。

“... O Angel — my mother says that it sometimes happens so — she knows several cases where they were worse than I, and the husband has not minded it much — has got over it at least. And yet the woman has not loved him as I do you!” (6)

「ああ、エンジェル—きょうごうごとはありがちだつて母が言つてましたわ—あたくしよりもっとひどい場合だつてごうごうもあるとごうごうですわ。それでも夫のほう

は、そんなことはあまり気にしないで——とにかく乗りこえてしまつてゐるんです。しかも、その女のほうは、あたしがあなたを愛しているほど、夫を愛してはいないんです」

また、その後で、エンジェルがテスの古い家系の含む頽廢的傾向について批判したときも彼女は次のように答える。

“... Lots of families are as bad as mine in that I Retty's family were once large landowners, and so were Dairyman Biletts's. And the Debyhouses, who now are carters, were once the De Bayeux family. You find such as I everywhere...” (7)

「そのことなら、あたしの家と同じくらい悪い家がたくさんありますわ。レティの家は大きな地主でしたし、乳しぼりをしてゐるビレットの家だつてそうでした。今じゃ馬車曳きのデビーハウスの家だつて、昔はド・ベイユ家だつたんです。あたしみたいなのは、どこにでもぎらにいますわ」

女性としての大きな試練に遭遇したとき、テスは、かつて母の手紙が主張してゐた、まなにその言葉をエンジェルに対して述べたのである。平静なときのテスだつたら、このような論法の無力さには十分気づいたことであらうし、こんな言葉を発することはいさぎよしとしなかつたであらう。「あたしみたいなのは、どこにでもぎらにいます」と言つたところでそれが自分の欠点を軽減することにはならず、むしろ自分の

くだらなさを示すだけであることを考えたことであろう。

ここでエンジェル・クレアはどういう種類の男であったかを考えてみよう。まず彼は知識人特有の抽象性や公式性を持つており、具体的な事がらが自分がかじめ立てた基準に適合している間は平穩でいられるが、一たびそれに合わない事態が起こった場合に、自分の基準について反省する弾力性は持つていない。エンジェルがテスと結婚しようと思いついた動機には、世間ずれした都会の女性よりも、いなかの純朴な娘の方が好ましいという、通り一遍で単純な気持ちが強かった。ところが、案に相違して、テスが昔栄えた古い家系の子孫であることを知り、さらに大きな打撃として、彼女に暗い過去があることを知らされたとき、エンジェルはテスが自分の考えていた花嫁候補の規格に合わないことを思うのみで、目の前の現実の彼女を見、その汚辱と苦惱をも含めてテスという一個の女性を愛する気持ちにはなれなかった。彼は、テスの実体よりも「純朴ないなか娘」というイメージだけが欲しかったのである。テスが敢えて告白したことにこそ、彼女の真の純粋さがあることには思い至らなかったものであり、このような男に対しては、テスの母親の教えたような態度をとることの方がふさわしかったであろう。作者はエンジェルについて次のように言っている。

...Clare's love was doubtless ethereal to a fault, imaginative to impracticability. With these natures, corporeal presence is sometimes less appealing than

corporeal absence; the latter creating an ideal presence that conveniently drops the defects of the real. She found that her personality did not plead her cause so forcibly as she had anticipated. (8)

(クレアの愛は明らかに、欠点といってよいほどに脱俗的であり、実行不可能といってよいほど空想的なものであった。こういう性質の人にとっては、目の前に肉体の存在することが、肉体の存在しないことよりも、心に訴える力が弱いことがよくある。後の場合には、うまい具合に、實在の欠点が忘れられ、理想的な姿が作り出されるからである。彼女は、自分の人間としての存在が、予期していたほど強い自分の味方になってくれないことを知った。)

テスと別れた後エンジェルは、ブラジルへ渡って苦勞を重ね、ある悟りに達しはした。それは「性格の美醜は、そのなしとげたことにのみあるのではなくて、その目的と動機にもある。真の歴史は、なされたことの中にあるのではなく、意図されたことの中にあるのだ」(The beauty or ugliness of a character lay not only in its achievements, but in its aims and impulses; its true history lay, not among things done, but among things willed. (9)) ということであつた。この標準から見ると、彼はテスに関する自分の判断が余りに苛酷だったことに気づき、イギリスへ戻つて来たのであつた。しかし結局において彼はその抽象性を脱し切

つてはいない。テスがアレクを殺したということを、彼女自身
の口から聞いたとき、彼は次のように考える。

...he looked at her as she lay upon his shoulder,
weeping with happiness, and wondered what ob-
scure strain in the D'Urberville blood had led to
this aberration—if it were aberration. (10) (うれし泣
きに泣きながら自分の肩にもたれてゐる彼女を眺めて、
彼はダーバヴィル家の血にひそんでゐるどんな隠れた気
質が、このような錯乱—それが錯乱だとしたら—に導い
たのだろうかといふか)。

エンジェルは、取り乱したテスを目の前に見ても、まずその
背後の祖先の血について考ふるタイプの男なのである。テス
がいかに自分を愛しているかに彼が思い至つたのは、その後
しばらくたってからであつた。

テスの誘惑者アレクもまた、ある意味でエンジェルと共通
の性質を持つてゐる。彼に処女を奪われたテスとその家を去
ろうとするとき、二人の間には次のような言葉が交わられ
る。

"I didn't understand your meaning till it was too
late."

"That's what every woman says."

"How can you dare to use such words! ... Did it
never strike your mind that what every woman
says some woman may feel!" (11) (「あなたの心の

中がわからなかつたんです。わかつたときはもう遅かつ
たのですわ」)

「そりゃ、女のきまり文句を」

「よくもまあ、そんなことが言えるものですね。……女
のきまり文句を、身にしみて感じてゐる女もいるってこ
とを、あなたは一度も思つてみたことはないんですか」
アレクは、テスの切実な叫びをも、「女のきまり文句」と
してしか感じない。エンジェルよりも *sophisticate* された
意味での抽象性を、彼もまた思考の根本に持つてゐるのであ
る。母親の死による一時的な衝動から彼は熱心な伝道者にな
るが、テスの口から、エンジェルが常々彼女に語つていた懐
疑的な言辞を伝えられることによつて、たちまちに元の生活
へと戻るのには、アレクとエンジェルとの思考法の近似性を物
語るものであろう。

アレクは、一旦あきらめたはずのテスをまた追いかけて回す
ようになるが、それについて次のように言つてゐる。

"Tess, my girl, I was on the way to, at least, so-
cial salvation till I saw you again! ... And why
then have you tempted me? I was firm as a man
could be till I saw those eyes and that mouth a-
gain — surely there never was such a maddening
mouth since Eve's!" (12) (「わが、テス、僕があなた
また会いまで、少なくとも、社会救済の道に向かつて
いたんだよ。……たのになぜまた僕を誘惑したんだよ。

その目とその口をまた見るまで、僕はこの上もなくしつかりした男だったんだ―たしかに、イブ以来、これほど男の心を狂わす口を持った女はいなかった」

エンジェルが、自分自身のロンドンでの放蕩のことは棚に上げて、テスの純潔の喪失を責めたように、アレクもまた、誘惑者としての自分の過去の行為は忘れて、テスが自分を誘惑したと言っているのである。一方は理想主義的、他方は官能的という差はあっても、ひとしく自己を反省する力を欠き、相手の実態を見ようとしない二人の男によって、テスは滅ぼされたのであった。

III

エンジェルとアレクが二人とも、真のテスを理解していないと同様、彼女を回る他の者たちもみな、テスの心の苦しみを察することができない。テスの父親は、娘が玉の輿に乗ることのみを夢みて、酒に酔いしれる怠け者だし、娘の味方になつてくれるはずの母親も甚だ浅薄な物の見方しかできない女である。テスがエンジェルとの結婚に破れて家に帰つて来たとき、母親は次のように言う。

…“Well, well, what's done can't be undone! I'm sure I don't know why children of my bringing forth should all be bigger simpletons than other people's— not to know better than to blab such a thing as that, when he couldn't ha' found it out

[III too late!]⁽¹³⁾ 「やれやれ、できてしまったことあ、取り返しはつかないよ。あたしの生んだ子供ときたら、ほんとにまあ、なんで、揃いも揃つてよそさまの子よりばかなんだらうねえ―黙つてさえいりゃ、あとでわかつたつて、もう遅すぎるつてことになるものを、べらべらしゃべつちまうよりほかに能がないなんて」

テスの美貌によつて一家を窮乏から救つてもらふことを期待していた母親には、彼女の標準から見れば、テスがへまなことばかりして、せつかつかまえそうになつた男たちを逃してしまい、苦勞の種を蒔くばかりなのは心外の至りなのである。彼女は次のように愚痴をこぼす。

“O, Tess, what's the use of your playing at marrying gentlemen, if it leaves us like this!”⁽¹⁴⁾

「ああ、テス、お前が紳士がたと結婚ごつこなんかしたつて、なんの役に立つんだね、あたしたちをこんな目に会わせておくのなら」

世間の人々にとつても、テスは、「いく度か妙な男關係を持つた」ふしだらな女にすぎない。テスの父親の死後、一家が今まで住んでいた土地を立ち退かされるのも、一つにはテスがこのような目で見られていたためであった。

周囲の者たちの目に抗して、あくまで自分を持していくだけの強さはテスにはなかった。危機に臨んだときのテスの考え方が、母親のそれにならうようになってきたことを前に見たが、エンジェルと別れてから貧乏に追われて各地で働くよ

うになつて後は、テスの生き方はさうに低い次元へと落ちて行く。「彼女が、あちこちさまよひ歩く無反省な本能には、何か野獸の習性にも似たものがあつた。」(“... there was something of the habitude of the wild animal in the unreflecting instinct with which she rambled on.”⁽¹⁵⁾)
マリマンに紹介された農場のあるフリンターロム・マッシュン (Flintcomb-Ash) へ行く途中、テスは雨に降られて濡れつゝある家の破風の下に入ると、

The wall felt warm to her back and shoulders, and she found that immediately within the gable was the cottage fireplace, the heat of which came through the bricks. She warmed her hands upon them, and also put her cheek—red and moist with the drizzle—against their comfortable surface. The wall seemed to be the only friend she had.⁽¹⁶⁾

(壁が背や肩に温く感じられたので、破風のすぐ内側がその小屋の炉になつていて、その熱が煉瓦を通して伝わってくるのだということがわかつた。彼女は煉瓦で両手を暖ため、また、頬——霧雨にぬれて赤く湿つてゐる頬——を、その気持ちのよい表面に押しあてた。この壁だけが彼女の味方であるように思われた。)

このあたりのテスの感じ方には「アダム・ビーユ」(Adam Bede) で、旅に疲れたヘティ (Hetty) が自分の命がむしやうにいとしくなり、袖をまくつて自分の腕に接吻するくだ

りを思わせるものがある。⁽¹⁷⁾ このようにして、テスは、単なる生物としての生き方に近づいて来つゝいる。農場に着いてマリマンと共に終日働くテスにつつては、次のように述べられてゐる。

... the whole field was in colour a desolate drab; it was a complexion without features.... The sky wore, in another colour, the same likeness: a white vacuity of countenance with the lineaments gone. So these two upper and nether visages confronted each other all day long, the white face looking down on the brown face, and the brown face looking up at the white face, without anything standing between them but the two girls crawling over the surface of the former like flies.⁽¹⁸⁾ (..... 畑全体が荒涼たる黄褐色であつた。それは田舎のなご顔の色のもようであつた。..... 空はまた、色こそ違へ、同じような様相を呈していて、造作のない顔の白い空虚であつた。このようにして、上と下との、この二つの顔は、一日中向かい合つて、白い顔は褐色の顔を見下し、褐色の顔は白い顔を見上げて、その間にあるものとして、ただ、前者の表面を蠅のように這つて歩く二人の女だけであつた。)

ほとんど自己を失ひ、動物同然の生き方にはいつて行つたテスには、もはや自分独自の心の働きはなくなつてしまつ

た。はじめはエンジェルがいつかは戻って来るものと信じ、その日をひそかに待っていたテスが、「エンジェルが二度と帰ってくるものか」とアレクにくり返し説かれることにより、ついにはそう思いこみ、アレクの情婦になってしまふのは、このような気持ちになつていたときであつた。

元来、女性としてのテスには、気丈な一面、自然の論理とでも呼ぶべき傾向があつて、自分の処女を奪つたアレクを憎みつつも、一度肉体の交わりを持った相手をきっぱりと拒絶することができなかった。最初のアレクとの事件の後、テスはアレクの家を去ろうとするが、そのとき追いかけて来たアレクによつて馬車に乗せられる。それでも、「彼女は今では彼が恐ろしくはなかつた。この安心の原因のなかに、彼女の悲しみがあつたのだ」(She had no fear of him now, and in the cause of her confidence her sorrow lay. (19)) として、アレクがキスしても彼女は抵抗せずに言つた、“See how you’ve mastered me!” (20) (「あたし、もうあなたの言いなりですわ」)

その後、エンジェルと別れて孤独の生活をしているテスに執拗につきまとうアレクをうるさいとは感じつつも、「肉体的な意味では、この男だけが自分の夫なのだという意識が、ますます彼女を圧迫するように思われた」(… a consciousness that in a brute sense this man alone was her husband seemed to weigh on her more and more. (21)) テスがついにアレクの隠し妻に身を落とすのは、家族の生活

の困窮を救うためという外面的な理由以外に、一度肉体の關係を持った相手に対する弱さが根本にあつたのである。生物としての生活にまで落ちてしまつた彼女には、自然の論理に打ち勝つだけの心の張りはなくなつていたのだ。

ブラジルから引きあげたエンジェルがテスを訪ねて来て、彼女がアレクと同棲していることを知つて立ち去つた後、テスがアレクを殺害するのは余りにも唐突なようにも思われる。しかし、彼女がその当時陥つていた心の情態について考えるとき、それはうなずけることである。アレクを殺してから、エンジェルに追いついたテスは言つている、“…only, Angel, will you forgive me my sin against you, now I have killed him? I thought as I ran along that you would be sure to forgive me now I have done that. It came to me as a shining light that I should get you back that way”. (22) (「……ただ、エンジェル、あの人を殺したんですから、あなたに対するあたしの罪を許して下さいなでしよう。走りながら、あたし考えたんです。もうあの人を殺してしまつたんだから、まことあなたは許して下さいなだらう。この方法であなたを取り返すんだという考えが、光のようにひらめいたのです」)

物心両面の苦勞に打ちひしがれた末テスは、自分たちの間を邪魔した男を殺すことによつて恋人を取り返すのだという余りにも直線的、物理的な考え方しできない女になつてしまつていたのである。

アレンクを殺したテスは、捕縛されるまでの数日間を、エン
 シェルと共にいなかの空屋敷ですごす。それは彼女に与えら
 れた最初で最後の安らかな生活であった。しかしそれが、死
 の影のもとでの、光彩を失った幸福感であったことは言うま
 どもあるまい。二人がこの家に近づくにつれて、「その鑑目をな
 らした者は、言つた眼球のやうだ、だれも見てゐる者ならな
 らうを示さねばならぬ」(Under his escort she went tardily
 forward to the main front, whose shuttered windows
 like sightless eyeballs, excluded the possibility of
 watchers. (23)) 「言つた眼球」はまた、「このとちの二人の心
 の状態」をもあつたであらう。

【註】

- 1) XXXI
- 2) XII
- 3) XIX
- 4) XXXII
- 5) XXXIII
- 6) XXXV
- 7) XXXV
- 8) XXXVI
- 9) XLIX
- 10) LVII
- 11) VIII
- 12) XLVI
- 13) XXXVIII

- 14) LII
- 15) XLI
- 16) XLII
- 17) *Adam Bede*, XXXVII
- 18) XLIII
- 19) XII
- 20) XII
- 21) LI
- 22) LVII
- 23) LVII